

穂山幹夫教授、金子俊夫教授、河野大機教授、
中村義人教授、秋本敏男准教授、退任記念号に寄せて

東洋大学経営学部ではこの度5名の教員が定年退職を迎えることになり、この経営論集第81号を退任記念号としてお届けする運びとなりました。ここでは編集委員長(学部長)として、これまでの投稿論文など経営学部の学術研究の発展に対する功績を感謝するとともに、新たな人生に向かわれる方々の門出を祝して、各先生方のご経歴などの紹介をさせて頂きつつ、思い出を記していくことで、巻頭言とさせて頂きたいと思います。なお別のページに各教員の職歴や業績の一覧がございますので、そちらも合わせてお読みくだされば幸いです。以下、五十音順に紹介させていただきます。

穂山幹夫教授は、早稲田大学大学院商学研究科博士課程を修了された後、3年間の他大学専任講師を経て、昭和48年より東洋大学経営学部専任講師、助教授、その後教授として科目「財務会計論」を中心として科目担当されてこられました。その間、実に40年間に渡って東洋大学に奉職され、教育、研究だけでなく、学部長として経営学部の運営、そして教務部長、教学担当常務理事など困難な大学改革を伴う大学運営に亘るすべての面において力を尽くされました。近年は井上円了記念博物館長を務めておられます。一方、会計学においては単著・共著22冊、論文29本など学術的貢献のみならず、社会における会計人育成にも尽力され、学会においては、主たる会計学諸学会の評議員、理事、そして日本学術会議会計学研究連絡委員会委員などを歴任し、日本の会計制度の教育・研究に尽力されました。その他、穂山幹夫教授の功績は、もはや大きすぎて書き切れません。実は、私が思い出す教授は「戦う経営学部」をスローガンとする20年前の穂山学部長の姿です。厳しさのなかにも温かさのある姿です。研究だけでなく、その教養の豊かさ深さは計り知れず、後輩のわれわれ教員・学生の模範となる人物であることは誰もが認めるところであります。月並みな言葉かもしれませんが、これまでのご功績を称え、かつこれまでのご尽力に衷心より感謝いたします。

金子俊夫教授は、中央大学大学院商学研究科修士課程の後、1971年博士課程を修了し、その後中央大学にて博士(商学)を取得されておられます。1973年より暁星商業短期大学専任講師、助教授を経て、1981年より東洋大学経営学部に来られ、専任講師、助教授を経て、1997年から現在まで教授として「商業史」の科目を担当してこられました。研究面では、もちろんイギリス商業史の全般にわたる業績を数多くあげておられます。主要な著書、論文一覧を拝覧させていただくと、特に1800年代のマンチェスターを中心とした反穀物法運動に関して造詣が深いものと察しました。またイギリス商業史を専攻されておられる関係で、1984-1985年、1987年、1991年にはバーミンガム大学社会経済史学科に名誉上級研究員として留学され、現在はバーミンガム大学学友でもあります。偶然が積み重なった歴史の織物のなかから必然の論理の糸を見つけ出し、その成果を人類全体が享受できる形で提出する作業は刻苦の連続だとお見受けします。それを完遂なさった金子教授は、大学を取り巻く制度や人口減少の影響をうけ変化の激しい研究環境のなか、学究の徒として一途に自分のテーマを追い続けてきたといえるのではないのでしょうか。永きにわたり個人としても学部としてもお世

話になりました。感謝いたします。

河野大機教授は、一橋大学大学院商学研究科修士課程修了・博士課程中退後、福島大学助教授、千葉大学助教授、教授、多摩大学教授を経て、東北大学教授を定年まで務め、2006年に名誉教授とされると同時に、東洋大学経営学部に来られました。経営学史学会、日本マネジメント学会に所属され、多数の研究業績を残されるとともに、バーナード理論、ドラッカー理論を中心にアメリカの実践経営学を究め、日本の経営学における学術の実質的な発展に貢献されておられます。東洋大学において、コーポレートガバナンス論、コンプライアンス経営論など学部教育のみならず大学院博士課程・修士課程の新設拡充に当たりご助力願うことになりました。先生が来られた頃、大学院経営学研究科では、経営学専攻修士課程のみ設置しておりましたが、その後ビジネス会計ファイナンス専攻、マーケティング専攻を含む全3専攻において修士課程博士課程が立ち上がりました。われわれ経営学部教員一同として、今日の経営学部および大学院教育の他に誇れる体制の出来上がった姿をみると、河野教授のご尽力には尊敬・畏敬の念とともに感謝の気持ちを捧げたいと思います。また河野教授の学問に対する真摯な姿勢は、その温厚な人柄にもかかわらず、学部学生・大学院生のみならず、われわれ後輩教員に対しても「高い山に登れ」という叱咤激励をいただいているような気がいたします。この気持ちを忘れないように一同精進していく所存です。

中村義人教授は、明治大学商学部を卒業後、1972年朝日監査法人（現あずさ監査法人）に入社され、ほどなくして公認会計士に登録、長年建設・製造・金融・IT企業の監査に従事されました。1996年開発企画部長としてODAなどを担当しつつ途上国の経営・会計を指導し、環境マネジメント部長を経て、2002年代表社員となりました。2004年より、あずさサステナビリティ株式会社にて代表取締役役に就任されています。その頃、大学院専攻の新設のため、2006年に東洋大学経営学部特任教授として来られました。その後も専任教授として学部の「会計監査論」「経営監査論」などの科目を担当されておられることはもちろんのこと、特に大学院経営学研究科ビジネス会計ファイナンス専攻においては専攻新設のときから絶大なるご助力をいただき、会計ファイナンス専門家養成コースの「基礎監査論」「上級監査論」において会計実践、監査実践の神髄を教授する科目を担当するとともに、中小企業診断士登録養成コースにおいては実践的な経営分析を担当していただいております。また教員としても、困難な時期に会計ファイナンス学科主任を引き受けて頂いたことも、申し訳なく心から感謝いたします。研究面としては、中村教授の探求する分野は広く深く、会計監査論、保証業務論、財務会計論、建設業会計、環境会計に亘っております。1989年から今日まで共著書18冊、ジャーナルへの投稿51本と、会計を取り巻く制度や社会環境の変化の中で、いずれも公認会計士に必須の最新の課題を探求するものであります。特に、1989年の「ブラジルのインフレーションとコレソン・モネタリア（貨幣価値修正会計）」は公認会計士制度40周年記念入選論文となっております。それらの成果は授業にも活かされ学部学生も大学院生も、中村教授の薫陶を受けたことを誇りにしていることと思います。

秋本敏男准教授は、民間企業で18年間勤務されつつ、勤労学生として経営学、マーケティング、会計学を学び、1987年3月横浜市立大学大学院経営学研究科を修了

され、産業能率短期大学兼任講師（簿記・会計学・経営分析担当）、高山短期大学専任講師（経営分析・管理会計・会計学・簿記担当）を経て、1997 年より東洋大学経営学部講師、助教授、その後現在まで准教授として、「経営分析論」「企業評価論」の科目担当されて来られました。研究面については会計学の観点から、「経営分析と企業評価」の分野で高い業績をあげておられます。ご著書・論文は 38 点および学会報告 8 件があり、なかには単著で版を重ねる（四訂版）一冊がございます。東洋大学の学術の発展に寄与されました。秋本先生には、私が第 2 部学科主任の折、第 2 部経営学会の運営面で一緒に働かせていただきました。その折には運営委員（ご意見番）として接して頂いたことで、非常に助けられた思いがあります。ここに記して感謝をいたします。

2013 年 3 月 15 日

経営学部長 旭 貴 朗

（追記）

河野大機教授は退職まであと 2 ヶ月を残す 1 月 29 日、千葉のご自宅にて心筋梗塞で亡くなりました。教員一同、心よりご冥福をお祈りいたします。

